天国の上野郁子先生へ

『絵手紙の花束』を届けたい

『絵手紙の花束～きらら窯から上野先生へ～』に寄せて

鈴木比佐雄

日笠明子さんは、手賀沼の岸辺近くの工房「きらら窯」で個性的なタッチの鳥や動植物を絵付けした陶芸作品を作り続けている。もう一人の著者である上野郁子さんは、明子さんの小学校一、二年生の担任教師だった。明子さんには障害があり言語発達も遅かったこともあり、「やり残したことがある」と言い上野先生は退職後に明子さんの個人指導を続けた。明子さんは、そんな上野先生と父母たち、陶芸の師である岩村守先生たちの支援によって自分の好きな道を切り拓いてきた。

二〇〇九年の十二月に上野先生は病に倒れたが、奇跡的に持ち直してリハビリを開始した。その言葉をまだ喋ることが出来ない時に、上野先生は介護をしているご子息の正人さんに明子さんの絵手紙が読みたいとの思いを伝えたらしい。以前から明子さんは折りに触れて上野先生に絵手紙を出していたからだろう。それを聞いた明子さんは、その日から独特の感受性で季節の花々や風物などを描き、自分の言葉を添えた絵手紙を正人さんに届けることを開始した。本書の表紙カバーの折り込まれたところに、明子さんが小学校一年の時に描いた『ライオンの親子』が収録されている。描かれた当時に上野先生はこの絵をとても誉めてくれたという。他の教科が出来なくても、上野先生は明子さんの絵の才能を発見してくれた初めての人になった。明子さんにとって自分のことを心配し続けてくれた存在であった上野先生が倒れて、どのような励ましが出来るかと思っていたが、絵手紙を望まれたことは、明子さんにとって何よりも嬉しかったに違いない。上野先生は明子さんの花の絵の繊細な色彩感覚が好きだったとお聞きしている。手賀沼に吹き渡る風、注がれる光、それらをたっぷり含んだ春から夏にかけての花々や樹木の緑、水辺に群れる水鳥たちの鳴声、犬や猫と戯れる子供たち、そんな命の輝きを明子さんの絵の中に感じて励まされ、きっと明子さんという教え子に深い感謝をされていたに違いない。

この絵手紙集が企画されたのは、不思議な瞬間だった。スピーチセラピストである渡邉倭文子さんたちの共著『ことばの育ちに寄りそって』のカバー表紙のために、刺し子作家になった野木泰宏さんの写真を撮ることが、昨年十一月半ばに決まっていた。後に裏表紙には日笠明子さんの陶芸工房で明子さんの陶芸作品と安部理恵子さんの創作活け花とのコラボレーションの撮影が追加された。その撮影以外に、明子さんの多くの陶芸作品と、出来れば二組の親子の自然な写真を撮りたいと思うようになった。私の詩友でカメラマンの柴田三吉さんなら、言葉を超えてアジア民衆の素顔を撮り続けていることもあり、障害のある芸術家たちと親子のさりげない素顔もうまく写してくれるだろうと考えていた。撮影日が近づいてきた頃に明子さんの母である弘子さんから横長の手描き画集が送られてきた。画集の片面には娘の明子さんの絵が描かれ、その裏面には恩師である上野郁子さんの絵が描かれていた。上野先生に贈られた明子さんの画集に、上野先生が後から絵を描いたもので、それを本に出来ないか相談したいとのことだった。また他にも作品は数多くあるとのことだった。当日の工房の撮影中に手描き画集以外の作品を見せてもらった。それが五十枚ほどの絵手紙だった。その場で一枚一枚拝見していると、なぜか私の頭の中に「絵手紙の花束」という言葉が浮かんできた。弘子さんには、「本に出来ると思われますので少しお時間を下さい」とお伝えした。私の中ではこの絵手紙を流れに沿って自然に配置するだけで素晴らしい絵手紙集が出来ることを確信していた。

それからしばらくして企画編集案と実際のカラーデザイン案も持参して、「きらら窯」を訪ねて日笠さんたちと打ち合わせをした。また病院から帰宅していた上野先生宅にもお邪魔して、内容を直接お伝えした。上野先生もご子息の正人さんも絵手紙集の企画編集案に賛同してくれて、製作は本格的に開始されたのだった。上野先生は私と日笠弘子さんが要望した、筆文字での絵手紙の短い返信を快く引き受けて書き上げてくれた。上野先生は最後の命の炎を振り絞って言葉を刻んでくれたのだと思う。そのような日笠明子さんと上野先生の

師弟愛によって本書が成立していることに、私は深い感動を抱いている。絵手紙の連作が愛する人を励ます素敵な心の花束に転化されることは奇跡のような思いがする。世代を超えて二人の関係が生み出した「絵手紙の花束」であり、「絵手紙の命のドラマ」である本書を多くの方々に手にとってもらい、生きることの素晴らしさと美しさを眼と心で感じてもらいたいと願っている。

上野先生は、最終校正が責了となり印刷にまわる頃に体調を崩されて、二月上旬に帰らぬ人となった。明子さんが届けた最後の絵手紙が上野先生の棺に一緒に納められて荼毘に付されたとお聞きしている。天国の上野郁子先生は、目を細めてきっと明子さんとの共著である『絵手紙の花束』を誰よりも喜んでくれているだろう。合掌